

04

手話言語における発話者（不）確信度

エリザベト・エンベルク＝ペデルセン

（コペンハーゲン大学 [デンマーク]）

要旨

認識的モダリティという用語は話者が述べる事柄の真理値についての確信度や、より多くの場合は、不確信度を伝達する言語表現の全てをカバーする。本研究のデータは、“太平洋の真ん中でボロボロのボートに乗っている時、あなたが生き延びることを最もよく保証してくれるものは何か”ということについての、手話言語話者の議論のビデオ録画である。2つの手話言語すなわち、日本手話とデンマーク手話を使用されるが、これらの手話はお互いに関係はなく、またお互いに関係のない多数派言語である日本語とデンマーク語の社会において少数言語である。

双方の手話ともに、この周りを取り囲む多数派言語の影響を受けている。その多数派言語と同様に、手話言語話者も認識動詞を一人称認識者と共に用い、補文を手話言語話者が確信を持つ、あるいは持たない点について用いる。それぞれの手話言語における優勢な語順は、多数派言語に見られる動詞と補文の順序を反映しており、日本手話では補文＋認識動詞、デンマーク手話では認識動詞＋補文の順になっている。しかし双方ともに逆の順序も用い、さらに、多くの手話言語に見られる認識動詞＋補文＋認識動詞という、最後に動詞の繰り返しの構造を持つ動詞サンドイッチ構文（Fischer and Janis 1990）と代名詞コピー（Padden 1988）も使用している。

多数派言語とは独立に、これらの2つの手話言語は異なる意味分野から取り入れた独自の認識的モダリティをも発達させている。日本手話では、YES（SAMEより）とSENSEという語を（cf. Akahori, Yano, Matsuoka and Oka 2013）返事や相槌として、さらには文に統合された認識的モダリティを示す終末詞として使用する。デンマーク手話ではメタフォリカルに受け手への話の中身を示す身振りを（Engberg-Pedersen 2002）、返事や相槌や認識的不確信を示す認知動詞として使用する。従って双方のタイプの認識的モダリティの標識は、認識的標識としての機能に加えて、談話を構成する機能も持っているといえる。認識的標識としては、これらは2つの手話言語において、その言語の主要な構造タイプに合わせて構造的に異なった位置に現れる。その2つの互いに無関係な手話に見られる標識の、談話を構成する機能は、どのように不確信の表現が生み出されるかを、話者たちが不確信の表現に加えていかに合意を形成するかによって示すと考えられる。そしてこの認識的モダリティの標識は、双方の手話がどのようにマジョリティーの言語に影響されているか、そして関連する意味をコミュニケーションの中で表現する独自の手段をいかに発達させているかを明らかにするものである。